

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 4 月 26 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02357

研究課題名(和文) ミュア『アラスカの旅』における科学と文学の融合に関する研究

研究課題名(英文) John Muir on the Fusion of Science and Literature: A Study of "Travels in Alaska"

研究代表者

柴崎 文一 (Shibasaki, Fumikazu)

明治大学・政治経済学部・専任教授

研究者番号：90260124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ミュア J. Muir が初めてアラスカ探検に旅立った際の経緯と、ミュア・ネイチャーライティングにおける最大の特徴である「文学と科学の融合」を、彼の『アラスカの旅』の中に読み解こうとしたものである。L. M. Wolfeは、1879年7月にヨセミテでS. Jacksonが行った講演に接したことがミュアにアラスカ行きを思い立たせた契機であるとしているが、本研究は、これが誤りであることを実証した。また、同作品においてミュアが、先住民の遺物に関する「科学的記述」と「主観的な描写」の統合的叙述によって、文学と科学の融合を目指していることを、詳細なテキスト解釈に基づいて論じた。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on J. Muir's Alaska trip of 1879 from two points of view. The first is descriptive and objective. The second focus is on identifying the type of thinking that underlies the writing of "Travels in Alaska." L. M. Wolfe suggests that it was a lecture by S. Jackson in the Yosemite Valley in June 1879 that spurred him to go. But Muir's letter to his fiancée Louisa (dated July 9, 1879) implies that his meeting with Lieutenant C. L. Hooper in Port Townsend should be considered as the original stimulus for his trip to Alaska.

In "Travels in Alaska" we can see Muir attempting to fuse literature, intuition and science. He opines that that indigenous artifacts such as totem poles should be left in their original position; outsiders should not be allowed to collect them for any reason. The study of native American society and culture should be explored by means of what he calls "predication," a fusion of scientific description and subjective representation.

研究分野：英米・英語圏文学

キーワード：ジョン・ミュア アラスカの旅 ネイチャーライティング 科学と文学

1. 研究開始当初の背景

アメリカのネイチャーライティングは、人里に隣接したフロントカントリーの、牧歌的な自然美と、たやすく人間を寄せ付けぬバックカントリーの、野生的な自然美の両面から、自然の意味や価値を捉えていくところに本質的な特徴がある。フロントカントリーの魅力を描いた代表的な作家は、ソローH. D. Thoreauに他ならないが、バックカントリーのネイチャーライティングを確立した作家は、ミューアであると言ってよいだろう。バックカントリーを描いた作品には、バートラム W. Bartram やオーデュボン J. J. Audubon に代表されるような前哨的作品があるが、これらは、ミューア J. Muir を経て一つの主流を形成し、後の E. P. Abbey や G. Snyder らへとつながる、ネイチャーライティングの大河へと発展して行くことになるのである。それ故、バックカントリーのネイチャーライティング研究は、ミューアの作品研究を抜きにして成立し得ない。そのためアメリカには、F. Turner や B. J. Gisel に代表されるミューア文学の研究者が多数存在するが、我が国でミューア文学を研究対象とする者は極めて少ないのが現状である。ただしアメリカの研究においても、そのほとんどは、*My First Summer in the Sierra* や *The Mountains of California* を中心とした、ヨセミテ渓谷やシエラネバダの自然に関連した作品を扱ったもので、アラスカの原生自然を舞台としたミューアの文学を研究したものは非常に少ない。アラスカとミューアの関係を描いている研究者としては、僅かにカンザス大学の D. Worser 教授が挙げられるのみであると言ってよいだろう。K. Heacox による *John Muir and the ice that started a fire* が 2014 年に出版されたが、これはミューアのアラスカ探検をベースにした評伝であって、文学研究の範疇に入るものではない。しかしミューアは生涯に七度アラスカ探検に出かけ、1914 年に彼が亡くなった時、そのベッドサイドに置かれていたものは、『アラスカの旅』*Travels in Alaska* の原稿であったところからも、ミューア文学の全体像を把握するために、彼とアラスカとの関係を詳らかにすることは必須の課題であると考え、本研究を構想した。

2. 研究の目的

ジョン・ミューアは「アメリカ国立公園の父」と呼ばれ、その名は我が国におけるネイチャーライティング研究の世界でもよく知られているが、現在国内には、ミューアに関する専門的な研究者は少ない。しかし、アメリカ文学において、「バックカントリー」のネイチャーライティングが確立する上で、ミューアの果たした役割は極めて大きい。本研究代表者は拙著『アメリカ自然思想の源流』において、ヨセミテ時代のミューアに関しては詳細な研究結果を提示

したが、ミューアの全体像を捉えるまでには至っていない。本研究は、アラスカを舞台とするミューアの思想と文学を取り上げ、彼が目指した「科学と文学の融合」の姿を明示することによって、ミューア・ネイチャーライティングの特質を明らかにしようとしたものである。

3. 研究の方法

1) アラスカ行の動機と経緯の解明

1864 年にヨセミテ渓谷が、カリフォルニアの州立公園となって以来、70 年代にミューアが発表した、多くの新聞記事やエッセイによる効果もあって、ヨセミテやシエラネバダの存在がポピュラーなものとなって行った。その結果、シエラネバダの渓谷や高原には、観光客ばかりでなく、放牧や森林伐採などの商業利用者たちも多数入り込むようになり、本来「原生自然の美」を求めて止まないミューアにとって、シエラネバダは徐々に「原生自然」の地ではなくなって行った。こうして彼にとって、アメリカに残された最後の、そして本来の意味での「原生自然」は、アラスカ以外にはなくなったことが、ミューアをアラスカに引き寄せた最大の要因だったのではないかと、という仮説を立てた。この仮説の真偽を、『アラスカの旅』及び草稿、日記等の綿密な調査を通して検証した。同時にミューアがアラスカ探検に赴くことになった具体的な経緯についても実証的な考察を行った。

2) 科学と文学の融合

「科学と文学の融合」は、バートラム以来、ソローやミューアを経て、カーソン R. Carson において完成する、アメリカン・ネイチャーライティングにおける最大のテーマの一つである。しかし、これまでのネイチャーライティング研究では、この流れの中でミューアの果たした役割を適切に評価することが希薄であったと本研究代表者は見ている。『アラスカの旅』には、先住民の遺物をめぐって、ミューアが科学的記述と文学的描写を融合させようとしている様子が、ありありと示されている。本研究では作品の解釈に加え、草稿やメモ類の分析も交えて、総合的な観点から、ミューアの目指した「科学と文学の融合」の姿を読み解くことを目指した。

4. 研究成果

ミューアにとって初めてのアラスカ探検は、1879 年 7 月 14 日から同年 12 月末までのもので、この時の記録は『アラスカの旅』の第 1 部としてまとめられている。ミューアがアラスカ探検に向かうことになった経緯については、1879 年の 6 月にヨセミテ渓谷で開催された「日曜学校大会」で、当時アラスカで布教活動に従事していた長老派のシェルダン・ジャクソン S. Jackson が行ったアラスカに関する講演にミューアが接したことが、彼にアラスカへの探検旅行を思い立たせた契機である、とウルフ L. M. Wolfe がして

以来、この説がミューア研究において、言わば定説のように見なされてきた。

しかし6月9日にヨセミテでジャクソンの講演を聞いてから、6月20日にサンフランシスコ港を出発するまでの彼の日記や手帳、書簡などを調べても、アラスカ行き明確な意思が示されたものは発見できなかった。唯一、出発の前日にカー夫人 J. Carr 宛てに送られた短い手紙の中に、「アラスカにも行くかもしれません」という一文があるだけだ。また別の書簡から、6月初めにマッケイ Mackey という友人からミューアが、プリティッシュ・コロンビア州知事への紹介状を得ていたことが分かる。さらにサンフランシスコ港を出発してからのミューアの足取りを見ても、当初の彼の目的はアラスカではなく、ワシントン準州のピュージェット・サウンドからプリティッシュ・コロンビアにかけての北西海岸沿いを巡ることだったと推察される。しかし7月9日にミューアが婚約者に送った手紙から、ポート・タウンSEND Port Townsend でフーパー Hooper 大佐という人物と出会い、彼が指揮する密輸監視艇でアラスカに行くことを誘われたことからミューアの気持ちが固まって、アラスカ行きが具体化したことが分かった。以上のようにミューアが初めてアラスカ探検に向かった経緯は、ウルフの説とは異なったものだったことを成果論文において示すことができた。

『アラスカの旅』の中でミューアは、ジャクソンが先住民の村からトーテムポールを持ち去ろうとしたことを、「瀆聖」にも等しい所業だとし、強く非難している。そしてミューアは、他の全ての作品で、自然に対する人間の介入を徹底して排除する「保護」の思想を提唱してきたように、先住民の文化や社会の研究においても、収集などの人為的介入を排し、対象の「科学的記述」と、観察者の「主観的な描写」によって遂行されるべきであることを示している。こうして我々は、自然科学的な対象に関してのみならず、民族学的なテーマに関しても、ミューアが「文学と科学の融合」を試みようとしていたことを、『アラスカの旅』の中に見出すことができるのである。この点についても、成果論文の中で、様々なテキスト資料に基づく論を展開することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

柴崎文一、シェリング『自由論』の成立契機と根本問題、明治大学人文科学研究所紀要、78 冊、2016、109-129.

柴崎文一、ジョン・ミューアにおける科学と文学の融合、明治大学人文科学研究所年報、57 号、2016、47-48.

柴崎文一、ジョン・ミューアにおける科

学と文学の融合：『アラスカの旅』を中心として、明治大学人文科学研究所年報、58 号、2017、47-48.

柴崎文一、ジョン・ミューアのアラスカ紀行(1879): 出発の契機と、科学と文学の融合、明治大学人文科学研究所紀要、83 冊、2018、115-133.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

柴崎文一、『サモン論理学準拠 演繹法の論理ノート』、デザインエッグ社、2015、102 ページ.

柴崎文一、『サモン論理学準拠 帰納法と科学の論理ノート』、2016、112 ページ.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴崎 文一 (SHIBASAKI Fumikazu)

明治大学・政治経済学部・教授

研究者番号：90260124

(2) 研究分担者

無し()

研究者番号：

(3) 連携研究者

無し()

研究者番号：

(4) 研究協力者

無し()

